

いきいき

VOL.23
平成21年11月4日
いわき市総合教育センター

■ 2学期の中間期にあたって

- 各学校では、実りの秋の教育活動に精力的に励んでおられることと思います。
- 今号も前号に引き続き、児童生徒の姿から見えてくる問題点を挙げ、その改善について考えていきたいと思います。

ルールが守れない子への対応：「規範意識と自我同一性を育てる」

社会生活は様々な規則やルールによって成り立っています。学校にもその準備として、集団生活がスムーズにいくようにきまりやルールが設けられています。

しかし、きまりやルールが守れない子がいます。その子たちを大きく分けてみるとの3つになります。これを今回は子どもの発達の観点から考えてみます。

- ① 善悪の判断がつかない子
- ② 善悪の判断は頭では一応分かっているが、規範意識が欠如している子
- ③ 規範意識はもっているが、それを行動に出せない子

1 ブレーキがかからない子

規範意識(ルールを守ろうという意識)は、幼児期後期(3歳から5歳)に大人の一貫した対応を通してとりあえず善悪の判断ができる超自我を育てることから始まり、児童期(6歳から12歳)までの長い時間をかけて形成されていくと言われます。これは車に例えるとブレーキに相当します。

ところが、現在は情報化が進む中で多様な価値観が広まり、子どもたちに規範意識を形成していくのが難しい時代となっています。

2 ハンドルがきかない子

「自我同一性(一貫した自分らしさ)」の獲得は、自分を客観的に見ることを可能とし、自分の長所や短所を自分自身で把握することができるようになります。そして、それができるようになって初めて、他者(周囲)との関係の中で自分を生かすための「調整」が図られることになります。これは車に例えるとハンドルに相当します。

ところが、大人から自分の適性や能力をはるかに超える過剰な期待をかけ過ぎられたり、逆に、放任や否定など全く期待されなかったりすると、正しい自己像「自我同一性」を獲得することができません。すると、自分に合った選択をすることや他者との関係を上手につかむことが難しくなり、多くの不安や悩みを抱え込んでしまうようになります。ここに、思春期特有の衝動性・攻撃性が加わり、規範を逸脱するような行動が現れやすくなります。

実際に問題行動の根底には、親や教師に人格を認めてもらえない不満と不安がある場合が多くあります。また、高圧的な態度で育てられた子は、その子自身も高圧的な態度で人に接する傾向があります。

3 改善策(ブレーキとハンドルが機能するように)

- 幼児期から、大人自身がモデルとなって「良い」「悪い」を一貫して示し、子ども達に正しい善悪の判断を持たせる。
- 児童期を中心に、自分の力でルールを守ろうとする規範意識を体験的に教える。
- 思春期に、自分を正しく受け止められることができるような自我同一性を獲得させる。